

旦那衆の山のぼり

■ 吉野群峯踏破記(その一) ■ な5 民俗通信 ■ 273

西村 博美

▼水木要太郎

地理歴史学者の水木要太郎(一八六五~一九三三年)は、「吉野精華」(史蹟研究会、一九一四年)に記している。

「大峰の山上嶽は吉野山を走る五里半海拔六千余尺。其頂点は役行者が藏王権現の靈験を得たる處、本堂はその地に建設せられたるなりといふ」

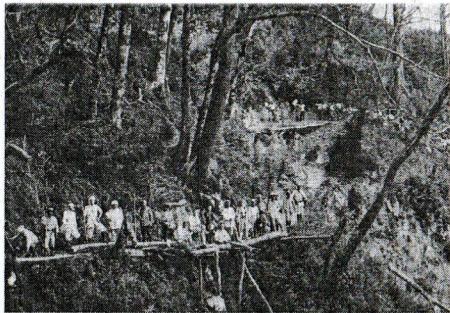
役行者(えんのぎょうじや)は、葛城山の麓(茅原)で生まれ、飛鳥から奈良時代に活躍し、修道の開祖と伝えられる。

また、今や修道は旧時の態を存ぜずと雖(いえど)も無比

の靈山は今猶夏時に於て幾万白衣の賓客を見る亦(また)盛んなるといふべし」(水木同書)とされた吉野・大峯(大峯奥駆道、おおみね・おくがけみち)。

は、高野山(高野山町石道)、熊野三山(熊野参詣道)とともに「紀伊山地の靈場と参詣道」として二〇〇四年に世界遺産(文化遺産)に登録されている。

さらに水木は、「私共の希望する所は高等小学校生徒などが卒業する時分には、卒業旅行として大峰のやうな所に参らせたい、幸ひ斯う云ふ手近に良い場



小井岳の山腹を行く踏破団(『吉野群峯』写真集) 大正5年 木元光三郎刊

関西で山岳熱の高まり

にあつた奈良女子高等師範学校(現、奈良女子大学)の学生に

は、これを勧め得べくもない。大峰は當時も、そして今も「女

一般の人もまた、夏は打ち連れて山

登りをするような習慣は、実によいでないか」と水木

は語り、木本をこれを受けたるよう、「從来縦走を試みたもの、樵夫獵者は揃いて問はず、多くは修道者に

して山伏以外此の行を為せるもの」として、白井光太郎(理学博士)と河東碧梧桐(俳人)の二人の名を挙げつとも、かねてから連峰踏破の腹案があつた木の背中を押したのは他なら

ぬ、水木のその日の講演で

あつたと思われる。

木本光三郎(一八七八~

峯)積精社、木本光三郎編、一九一七年)。

「専門の修道者のみならず一般の人もまた、夏は打ち連れて山

登りをするような習慣は、

実によいでないか」と水木

は語り、木本をこれを受けたるよう、「從来縦走を試みたもの、樵夫獵者は揃いて問はず、多くは修道者に

して山伏以外此の行を為せるもの」として、白井光太郎(理学博士)と河東碧梧桐(俳人)の二人の名を挙げつとも、かねてから連峰踏破の腹案があつた木の背中を押したのは他なら

ぬ、水木のその日の講演で

あつたと思われる。

木本光三郎(一八七八~

峯)積精社、木本光三郎編、一九一七年)。

一方、「余の計画は遙かに其

の前年にあり。しかも俗用多端なる一行は其実行に於て両社よ

り數日を後のこととなるぬ」(前掲書)と木本は、やや口惜

しい思いも抱きつつ、連峰踏破を敢行する。

一行は、木本のほか、阪本仙次(团长)、関信太郎、岩本武助、関基吉のいずれも実業家を

起人、諸井金太郎(林業技師)、吉村定光(砲兵少佐)、藤忠兵衛(実業家)、山本源三郎(林業家)、岸田英夫(日出男)、北村武(写真家)、伊

次(团长)、関信太郎、岩本武助、関基吉のいずれも実業家を

起人、諸井金太郎(林業技師)、吉村定光(砲兵少佐)、藤忠兵衛(実業家)、山本源三

郎(林業家)、岸田英夫(日出男)、北村武(写真家)、伊

一九八九年)は、奈良市に生まれ、山林・不動産業を営む。奈良産業銀行頭取などを務め、奈良瓦斯(ガス)会社や、生駒鋼索(こうさく)鐵道創設にも関

り、名物の鮎に舌鼓し英氣を養った踏破団一行は翌朝四時十分、大先達(せんだつ)、法螺(ぼら)、強力(ごうりき)等の三

大正四(一九一五)年、日本山岳会が大阪で講演会と展覧会を開くや、関西の山岳熱がとみ

に高まり、これに呼応するよう

に朝日・毎日新聞の二社は、吉野峰を「大和アルプス」と呼ぶなどと便宜を与へられた水木教授(要太郎)……」(『吉野群

以下、当時奈良実科高等女学校の校長を務めた森口奈良吉の記録によつて、踏破行の道筋を追つことにする(『前掲書』、

大正元年に開通した(『大和アル

ブス井台ヶ原山』、大和アル

ブス井台ヶ原山)は現存している。森口は芳山の筆名で踏破記及び

写真解説を記している)。吉野山金峯山寺(きんぶせんじ)黒門(くろもん)近くへ一行の泊まつた旅館(さくや)は現存している。

また、大正元年に開通した吉野鉄道によって、関西線の湊町から「吉野行觀桺列車」を仕立てる、湊町・王寺・高田・吉野

の前年にあり。しかも俗用多端なる一行は其実行に於て両社より數日を後のこととなるぬ」(前掲書)と木本は、やや口惜しい思いも抱きつつ、連峰踏破を敢行する。

一行は、木本のほか、阪本仙次(团长)、関信太郎、岩本武助、関基吉のいずれも実業家を

起人、諸井金太郎(林業技師)、吉村定光(砲兵少佐)、藤忠兵衛(実業家)、山本源三

郎(林業家)、岸田英夫(日出男)、北村武(写真家)、伊

次(团长)、関信太郎、岩本武助、関基吉のいずれも実業家を

起人、諸井金太郎(林業技師)、吉村定光(砲兵少佐)、藤忠兵衛(実業家)、山本源三

郎(林業家)、岸田英夫(日出男)、北村武(写真家)、伊

一九八九年)は、奈良市に生まれ、山林・不動産業を営む。奈良産業銀行頭取などを務め、奈良瓦斯(ガス)会社や、生駒鋼索(こうさく)鐵道創設にも関

り、名物の鮎に舌鼓し英氣を養つた踏破団一行は翌朝四時十分、大先達(せんだつ)、法螺(ぼら)、強力(ごうりき)等の三

大正四(一九一五)年、日本山岳会が大阪で講演会と展覧会を開くや、関西の山岳熱がとみ

に高まり、これに呼応するよう

に朝日・毎日新聞の二社は、吉野峰を「大和アルプス」と呼ぶなどと便宜を与へられた水木教授(要太郎)……」(『吉野群

以下、当時奈良実科高等女学校の校長を務めた森口奈良吉の記録によつて、踏破行の道筋を追つことにする(『前掲書』、

大正元年に開通した(『大和アル

ブス井台ヶ原山』、大和アル

ブス井台ヶ原山)は現存している。森口は芳山の筆名で踏破記及び

写真解説を記している)。吉野山金峯山寺(きんぶせんじ)黒門(くろもん)近くへ一行の泊まつた旅館(さくや)は現存している。

また、大正元年に開通した吉野鉄道によって、関西線の湊町から「吉野行觀桺列車」を仕立てる、湊町・王寺・高田・吉野

の前年にあり。しかも俗用多端なる一行は其実行に於て両社より數日を後のこととなるぬ」(前掲書)と木本は、やや口惜しい思いも抱きつつ、連峰踏破を敢行する。

一行は、木本のほか、阪本仙次(团长)、関信太郎、岩本武助、関基吉のいずれも実業家を

起人、諸井金太郎(林業技師)、吉村定光(砲兵少佐)、藤忠兵衛(実業家)、山本源三

郎(林業家)、岸田英夫(日出男)、北村武(写真家)、伊

次(团长)、関信太郎、岩本武助、関基吉のいずれも実業家を

起人、諸井金太郎(林業技師)、吉村定光(砲兵少佐)、藤忠兵衛(実業家)、山本源三

郎(林業家)、岸田英夫(日出男)、北村武(写真家)、伊